

実習 B 通信システム設計演習

三軒家 佑將

1026-26-5817

1 目的

アナログ無線受信機の 3 方式、すなわち、ストレート受信機、スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機、同期検波受信機について、National Instruments 社のシミュレーションソフト LabVIEW を用いて受信回路を作成し、特性を解析する。

2 方法

2.1 LabVIEW の使い方

教科書の例に習い、OOK 信号を出力する回路を作成した。

2.2 用いる素子の特性解析

2.2.1 LPF

与えられたファイル (whistler.vi) とホイッスラー音声ファイル (whistler.wav) を用いて、LPF の動作を確認した。

また、与えられたファイル (chirp.vi) を用いて、LPF による劣化量 ϵ が最小になるようなカットオフ周波数を数値的に求めた。ここで、劣化量 ϵ は、

$$\epsilon = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^N (S_{org} - S_{rec})^2}{N \overline{S_{org}^2}}}$$

によって定めた。

2.2.2 Amp

Amp ブロックに Sin 波を入力し、出力波形を観察した。また、Dist ブロックにより歪み率を測定して、増幅度による波形劣化の様子を調べた。

2.3 送信機・受信機の作成

2.3.1 アナログ送信波の構成

異なる搬送波周波数の3つのAM変調波と、適当な最大雑音振幅をもつガウス雑音を足し合わせ、アナログ送信波を構成した。3つのAM変調波のパラメータは以下の通りとした。

所望波 搬送波周波数 1400kHz

変調周波数 1000Hz

変調度 40%

妨害波 1 搬送波周波数 1350kHz

変調周波数 1100Hz

変調度 40%

妨害波 2 搬送波周波数 1450kHz

変調周波数 900Hz

変調度 40%

また、この送信波回路とBPF、Ampを用いて、高周波増幅を行ない、BPFのQ値によって、妨害波の抑圧度 α がどう変化するかを調べた。ここで、妨害度 α は、

$$\alpha = P_D - \max(P_{I1}, P_{I2}) \quad (1)$$

によって定めた。ただし、 P_D は所望波の出力(dB)を、 P_{I1}, P_{I2} はそれぞれ妨害波1,2の出力(dB)を表している。

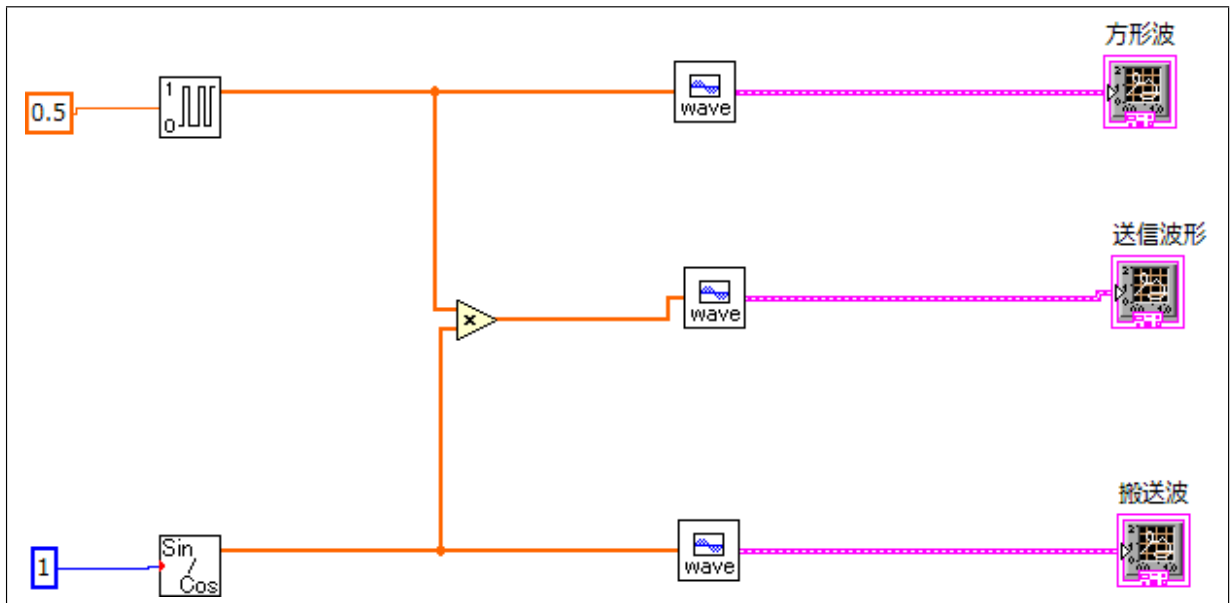


図1 OOK 信号出力回路

2.3.2 デジタル送信波の構成

2.3.3 ストレート受信機の作成

2.3.4 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

2.3.5 同期検波受信機の作成

2.4 アナログ信号受信時の特性解析

2.4.1 ストレート受信機の作成

2.4.2 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

2.4.3 同期検波受信機の作成

2.5 デジタル信号受信時の特性解析

2.5.1 ストレート受信機の作成

2.5.2 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

2.5.3 同期検波受信機の作成

3 結果

3.1 LabVIEW の使い方

図1のように回路を作成した。

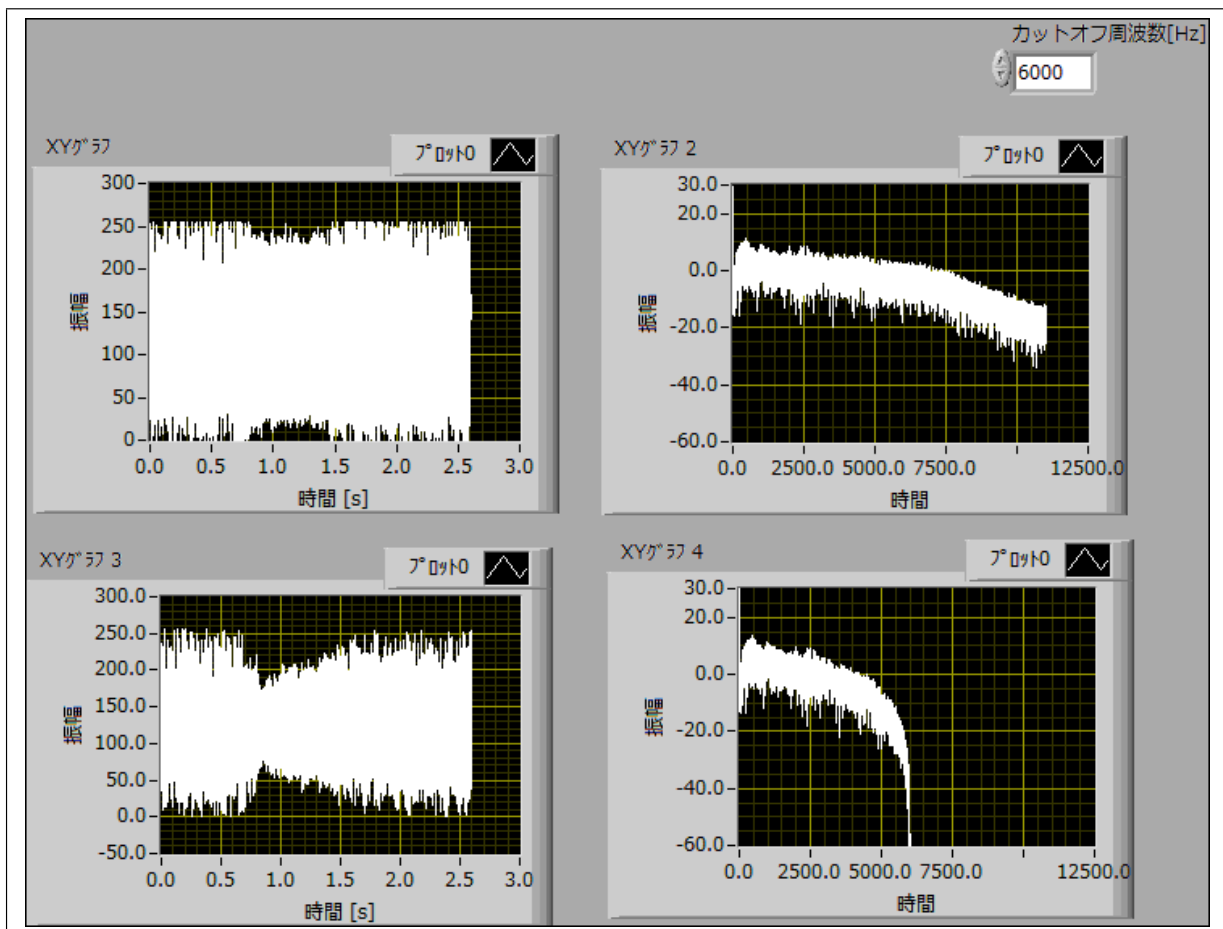


図2 LPF の動作

3.2 用いる素子の特性解析

3.2.1 LPF

LPF を用いてホイッスラー音声ファイルを加工したときの、音声波形と周波数スペクトルをグラフにしたのが図2である。また、LPF を用いて雑音の入った疑似ホイッスラー音声ファイルを加工したときの、音声波形と周波数スペクトルをグラフにしたのが図3である。

これらの図において、左の2つの図が音声波形であり、右の2つの図が周波数スペクトルである。また、上の2つの図がLPFの加工の前の音声についてのグラフであり、下の2つの図がLPFによる加工の後の音声についてのグラフである。

図2の周波数スペクトルを表す2つの図から、LPFによりカットオフ周波数(6000Hz)より大きい周波数成分がカットされている事がわかる。

劣化量 ϵ が最小になるカットオフ周波数 f_c を探索したところ、図3のとおり、 $f_c = 9000(Hz)$ 周辺にて劣化量が最小($\epsilon = 5.75$)となった。

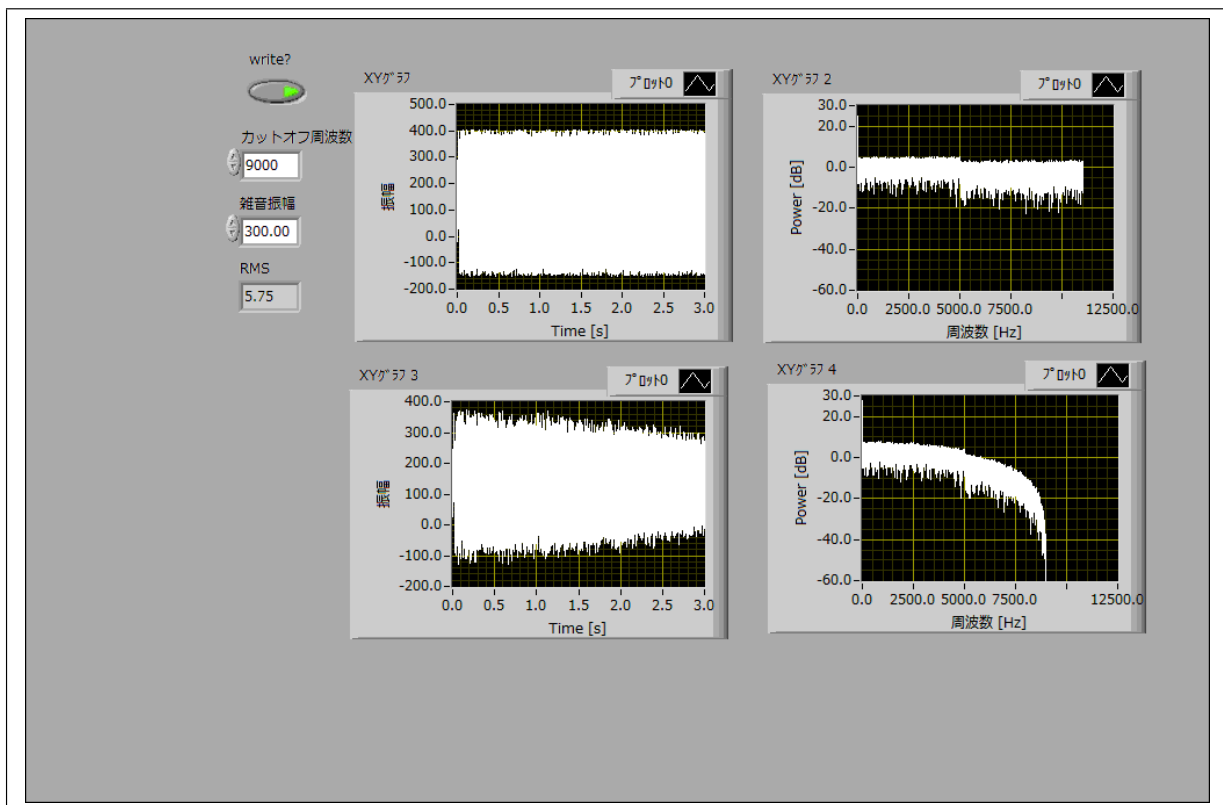


図3 LPFによる劣化

3.2.2 Amp

実験のミスにより、データが保存されていなかった。

3.3 送信機・受信機の作成

3.3.1 アナログ送信波の構成

Q 値	Pd(dB)	PI1(dB)	PI2(dB)	α (dB)
10	0.054	0.027	0.027	0.027
50	0.116	0	0	0.116
100	0.116	0	0	0.116

表1 Q 値ごとの妨害度

図4が、作成した回路である。この回路図の前段がアナログ送信機の回路であり、後段が高周波増幅回路である。

また、表1は、BPFのQ値と、その時の妨害波の抑圧度である。これを見ると、Q値が大きくなると、妨害波の抑圧度が大きくなる。

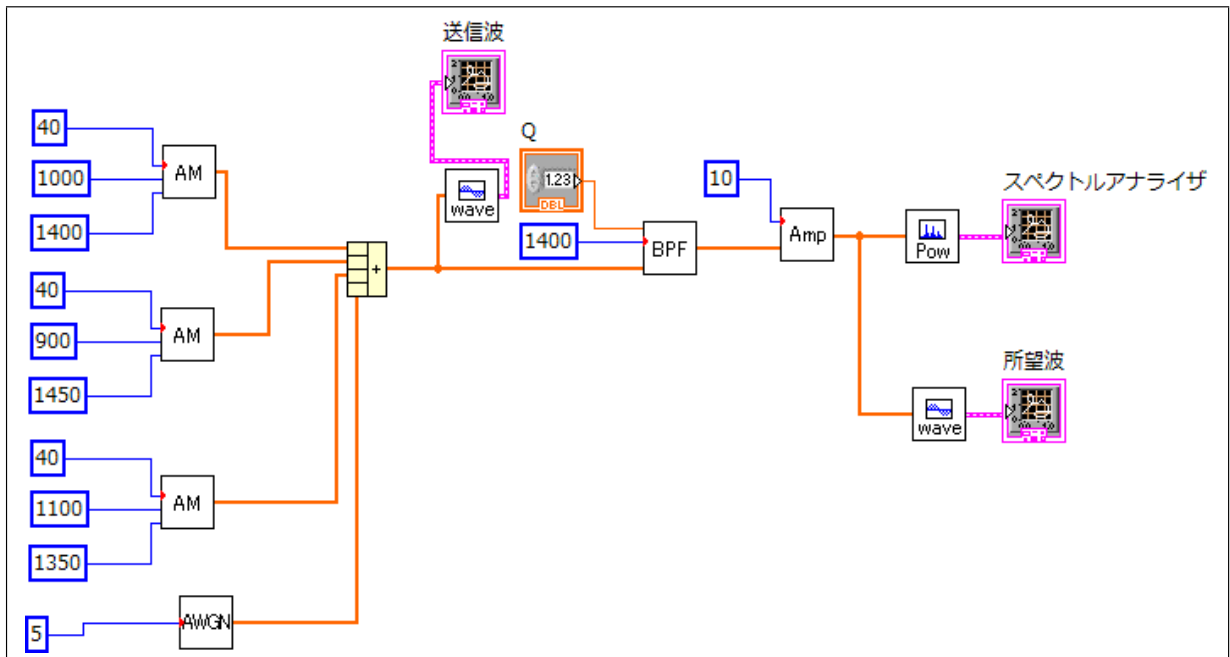


図4 アナログ送信機と高周波増幅回路

なると抑圧度が大きくなる事がわかる。

3.3.2 デジタル送信波の構成

3.3.3 ストレート受信機の作成

3.3.4 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

3.3.5 同期検波受信機の作成

3.4 アナログ信号受信時の特性解析

3.4.1 ストレート受信機の作成

3.4.2 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

3.4.3 同期検波受信機の作成

3.5 デジタル信号受信時の特性解析

3.5.1 ストレート受信機の作成

3.5.2 スーパーヘテロダイン 2 乗検波受信機の作成

3.5.3 同期検波受信機の作成

4 考察

4.1 課題 5

式 (1) が、抑圧度としての妥当性を考察する。

まず、抑圧度 α を、所望波の出力 A_D と、妨害波の出力 A_I を用いて、

$$\alpha = 10\log\left(\frac{A_D}{A_I}\right)$$

で定義する。ところで、パワースペクトルの値（所望波 P_D 、妨害波 P_I ）は、LabVIEW が表示するグラフ上ではデシベル単位で表示されているため、

$$\begin{aligned} P_D - P_I &= 10\log\left(\frac{A_D}{A_0}\right) - 10\log\left(\frac{A_I}{A_0}\right) \\ &= 10\log\left(\frac{A_D}{A_I}\right) \end{aligned}$$

である。ただし、 A_0 は、デシベルの基準値である。これより、

$$\alpha = P_D - P_I$$